

「考えさせる」府立3校を指導

高校野球の育成と発展に尽くした指導者を日本高校野球連盟と朝日新聞社が表彰する「育成功労賞」に、三国丘の辻英生監督(62)が選ばれた。三つの府立校で部員の手を伸ばしてきたことが評価された。

高校野球育成功労賞 三国丘・辻監督

1992年おぼろに鳳の監督として指導者としてのキャリアを始めた。信太を経て、2006年に母校・三国丘の監督に就任。18年の第100回全国選手権記念南大阪大会で8強に導いた。

強豪私学に比べてグラウンドを使える回数は少なく、練習時間も短い。だから「考えさせる指導」を心がける。「今の子は手をかけられすぎ、全部追い求めずに、やることを取捨選択した方がいい」

投攻守すべてを鍛え抜くには時間が足りない。その年に集った選手の特徴に応じた強化点を見極め、チームを作る。原点は、ある人から受けたアドバイスだったという。「全部追い求めずに、やることを取捨選択した方がいい」



身ぶり手ぶりを交えて技術を教える三国丘の辻監督。「情熱をもって指導することで、生徒にも熱くなってほしい」=大阪市住之江区

20年の独自大会 感慨深い、都道府県功労者 府高野連・大川副理事長

言葉をかけたのは、府高野連の大川潤一・副理事長(70)。今年、「都道府県功労者」に選出された。5年に1度の記念大会がある年に、育成や運営に功績があった人が表彰される。大川さんも監督、責任教師として母校の八尾など府立5校を指導し、その経験に基づいた助言だった。

大川さんは12年に理事となり、高野連の仕事が中心に。印象に残ることとして、コロナ禍だった20年夏の独自大会開催をあげる。選手権大会が中止になり、限られた時間、財源そして感染症対策という厳しい条件のもとで作り上げた。甲子園という目標がない大会でも、グラウンドで選手が懸命に野球をしている姿は今なお感慨深いという。

「長く関わった高校野球への恩返しとしてやってきた。評価してもらえたのはありがたい」と話した。(岡田健)



大川潤一さん